

◆連載-Vol.39

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)

## 新たな建築表現を求めて その6

### 内藤廣 風景の中に建物を置く

内藤廣は1992年に完成した「海の博物館」によって一躍その名を知られるようになったというのが定説ではあるが、むしろ私は「海の博物館」が大きな転換期であったと考える。

内藤は早稲田大学大学院で吉阪隆正に師事し、その後スペインのフェルナンド・イゲラスの事務所に2年、帰国して菊竹清訓の事務所に2年、そして独立。

大学院のころ、老練な西澤文隆、高橋誠一、そして当時は新進気鋭だった宮脇檀に囲まれて『新建築』の月評欄を担当した。もともと読者と同じ情報源で掲載された建物を論評するという趣旨だが、すでに月評欄の常連となっていた宮脇のワガママで実物も見てから書くというスタイルに切り替えた頃だ。1台の車に乗り込み、ときには高橋が、またあるときは宮脇が運転して1日かけて見られるだけ見て回り、会社に戻ってその日のうちに原稿を書き終えなければ帰さない。車中で話題は建築論議から食べ物へグルグル変わり、関西弁の西澤、ベランメエの高橋、そして博覧強記の宮脇が一緒だから賑やかなことこの上ない。その中に学生の内藤廣が挟まれている様子を想像して欲しい。控えめながら自分の意見をはっきりと言う内藤廣に対して、西澤が「学生さんにしてはシッカリしているね」と言ったのは記憶している。

処女作とも言うべきものは1984年発表の「ギャラリーTOM」。1950年生まれだから34歳、独立後3年目の作品である。これは彫刻のギャラリーで、目の不自由な人は触ることで彫刻を体験できる、当時としては異色のギャラリーである。斜めに架けられた天井梁の間がガラス張りで、そこから入る光のストライプが印象的な空間だった。

同じ年に完成した「住居No.1共生住宅」は自宅であり、内藤の家族とご両親の二世帯同居住宅である。構造体は一体的に連続するRCの壁構造だが外壁や間仕切りは木製パネルが用いられている。両者の居住部分を隔てる境壁は木製のパネル1枚。いずれ壁の位置を動かすことも可能だ。

音の問題はどうかと内藤に尋ねた。ある程度聞こえてしまうということがわかり、ご両親が不在の折に奥さんと両側に分かれ、声を出しながら、どこだと聞こえるか、どこならば聞こえないかを確認したという。

「親子でも直接は言いにくいけど言わなければならないことってあるでしょ。そんなときは聞こえるところで話すの。聞



### 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかに・まさと)  
1948年神奈川県生まれ。  
1971年千葉大学建築学科卒業。  
『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

かれては困ることは聞こえないところで話す。そうすればまったく問題ないし、むしろ生活音が聞こえてくるから安心できるんです。両親もそろそろ高齢だから」 遮音にこだわる住宅のクライアントには是非考えて欲しいことである。

しばらく住宅シリーズが続いたあと、大規模な初めての公共建築が「海の博物館」である。すでに原広司が、場所は異なるが同じ鳥羽に同名の「海の博物館」を1970年代に設計していたが、老朽化と収蔵品の増加による移転建てである。原の旧「海の博物館」はすでに現存していないが、敷地が狭くて高層化(と言っても5階前後だったと思う)せざるを得ず、展示するにはスペースが足りなかったように感じたのを覚えている。

内藤の「海の博物館」は、まず収蔵庫棟から建設が始められ、1990年に完成している。構造的なシステムは展示棟と同様で、特定のパターンの繰り返しであるが、こちらの構造体はプレキャストコンクリート。

収蔵庫が完成したときに写真を持って編集部に来たときのことは忘れられない。内藤としては収蔵庫空間自体よりエントランスホールに全力を注いだという意気込みを非常に強く感じたのである。エントランスホールの造形は、システムティックではなく造形的である。厚い木製の階段は曲線を描き、四周の漆喰壁も入隅、出隅ともに塗り回して表情は柔らかい。壁の下にはガラスはめ殺しの地窓が設けられていて、壁が浮いているように見える構成だ。

中でもいちばん力を入れたのが天井に設けられた小さな穴。残念ながら機能を失念してしまったが空調の吹き出しだったと思う。この曲線を出すのに、職人への説明にたいへん苦労したようだ。図面を見せても、いくら話してもわかってもらえなかった。最後には「女のお尻」といったら一発で「わかった」と言ってくれて、あの柔らかい線ができたこと、嬉しそうに話していた様子は忘れられない。

その頃の内藤はコップ半分くらいのピールで真っ赤になるほどだった。その男が飲めない酒を飲みながら職人に話したのだろう。そしてその甲斐はあったのだ。

ところが、得てして思わぬことは起こるもの。これだけ力を入れた収蔵庫棟のエントランスホールはそれほど話題にはならなかったが、2年後に展示棟が完成すると一気に評価が高まってしまった。

始めの取り組みから全体の完成まで、内藤は8年近く「海の博物館」に専念していた。世の中はバブルに湧いており、建



安曇野ちひろ美術館 エントランス



海の博物館 展示棟外観



海の博物館 収蔵庫棟エントランス



海の博物館 収蔵庫棟エントランスホール



海の博物館 漆喰壁の入隅、出隅



牧野富太郎記念館 公衆トイレ

築の世界でもさまざまな造形が百花繚乱。若手の進出も目覚ましかった。すべてが完成してみると、「海の博物館」は日本建築学会賞を始め建築関係のほとんどの賞を独占。もちろん内藤は喜んだが、その背後には、バブルの時期にいろんな建築家がさまざまな冒険にチャレンジしているのを横目で見ているしかない歯がゆさがあり、受賞によってそれが杞憂であったことを実感したからだ。もし、「海の博物館」が評価されなかったら自分の建築家生命は終わりだと思っていたという。

「思わぬことが起こると」記したのは、内藤自身の意気込みと世間の評価がずれていたことであり、それを内藤が実感せざるを得なかったということである。収蔵庫棟のエントランスホールへの情熱の傾け方を聞いて、ひょっとしたら内藤は村野藤吾の路線を考えていたのではないかと感じたからでもある。世間の評価は展示棟の構造システムに集中した。ここで内藤は進むべき方向を大幅に転換したのではなからうか。

ただ、リニアな空間展開というスタイルはすでに「住居No.1共生住宅」でも内在していた。直線的に連続する空間を、同じ構造システムのパターンを連結させてつくる。これは無限に展伸する可能性を含んでいる。その後、このパターンがさまざまな作品に展開しながら継続する。「海の博物館」が完成する1年前に完成した大分の「オートポリス」では2列を並べて構成したのは、その確認作業ではなかったか。

「安曇野ちひろ美術館」(1997)では数列のリニア空間を併走させたが、一方でエントランスへアクセスすると妻壁のガラス面を通して背後の山並みが望め、屋根の勾配が稜線の勾配に揃えられているのは、周辺環境への配慮だろう。

周辺環境への配慮については「建築の素形」という言葉で表現している。内藤がかなり初期から使っていた言葉だが、

自然の風景の中に、どのような形で建築を造形し配置するかという、内藤自身の建築への問いかけでもあっただろう。

周辺環境に対する配慮が、周辺に埋没させる意図が配置計画に顕著に表れたのは高知市の五台山中腹に計画された「牧野富太郎記念館」(1999)である。北斜面中腹に計画されたこの記念館は2棟で構成されており、いずれも傾斜に沿って展示室やホール、その他事務関係諸室が配されている。それまでの大きな違いはリニアではあるが直線ではなく、軸が曲線になっていることだ。

RCとSと木のハイブリッドだが、地面とそこから立ち上がる柱や壁はRC、屋根は木造でそれを支えるのが鉄骨という明快な構成だ。しかし工事はたいへんだった。棟にあたる円筒のパイプに垂木を接続するのだが、円筒だから墨が打てない。しかも棟の曲線と平面上のプランとは別だから垂木の長さも取り付く角度もすべて違う。屋根の工事は夏で、ガルバリウムを張る作業の時には屋根の温度が70℃にも達し、職人はすぐに交代しないと危険ですらあったという。

高知空港から市内に向かうバスは途中で五台山北側の国道を通る。完成時はともかく、数年後には完全に山腹に埋没した。よほど気をつけないとどこにあるのかわからない。内藤にしてみれば狙い目通りだったであろう。

蛇足ではあるが、「牧野富太郎記念館」駐車場には小さな公衆トイレがある。ここで内藤はスギ小幅板を仮枠にしたコンクリートの打放しを試みている。コンパネが普及するまではRC打放しの表面には型枠のスギの木目が転写されて、それなりの表情を持っていた。復活を期待したい。

風景が自然であれ都会であれ、その中にどのように建物を置くのか、どのような形態を与えるのか。これは設計者にとっては永遠の命題ではないだろうか。(続く)